

明治二十八年	鶴谷学館が私立学校として正式に認可された。(坂井永年経営)
四十年	大分県女子師範学校創立 南海部郡立社教員養成所開設
四十一年	国木田独歩没す。(六月二十三日)
四十二年	私立鶴谷学館廃止(一説には明治三十三年閉校)
四十四年	南海部郡立佐伯中学校設立
四十五年	佐伯町立実科女学校設立
大正五年	南海部郡立中学校を県立佐伯中学校と改称 南海部郡教育会付属図書館を大正前に移し南海図書館と与らためた。
十年	郡立佐伯実科高等女学校を郡立佐伯高等女学校と改称す
十二年	郡立佐伯高等女学校を県立佐伯女学校と改称
昭和十二年	石田豊城歿(七十四才)

随想

佐伯 糞尿 譚

臭い話でいささか恐縮ながら

会員 池田 田 田 作

明治末年の頃は、糞尿と厩肥が農家に以て主要な肥料であった。当時糞尿は、佐伯町の商家などから、大人一人一斗、小人一人五升宛の餅米を年末持参することを約し

(おわり)

て、これが入手に努めていた。之を称して「厩餅」といふ。そして村祭には親類同様、餅を持参、招待していた。昭和の初期には、満洲から大豆粕が大量に輸入されるようになり、家畜の飼料や肥料に用いられた。硫酸アンモニア、過燐酸石灰が盛んに施用された。

この頃、佐伯町周辺の農家の間には肥料組合が結成され、中村の勝田某が組合長に選ばれ、組合には新たに規約が出来た。

- 一 厩餅に関する糞尿持参の件は廃止。
- 二 汲取の際に持参するものは野系に限る。
- 三 他人の汲取先の横どりを禁ずる。
- 四 汲取桶には必ず蓋をすること。

昭和二十年頃には、肥料桶一荷(三十六リットル入)につき五十匁を頂戴していた。又車を利用して汲取り、それを農家の肥溜に運搬して、双方から金と貰うという商売人もあった。

町の肥取に糞米を年末持参き切り替えて、耕地の広い蛇崎部落の間では浦辺の肥取りを計画し、八軒の肥取船を作り、底の直径四十二釐、深さ五十五釐、三十リットル入りの桶を用意し、観見町の松浦から丹賀、梶寄方面まで出かけ、大たご一杯に付麥一升五合と交換していた。中には海水を入れたもの、木灰を入れ急括えのものもあった。斯様を粗悪ものは商談は成立しなかつた。

この大たごには制限はなく、磯爺さん所有のものは一まわり太かつた。欲と二人でかついたものといわれていた。

かつて郡農会の佐藤技師が、
「ここは蛇崎 向いは女島
中をとりにしつ ウニコセン (車本寄書載)

と教を作った。尿^{しん}尿^りの運搬に使用する肥とリ船をウンコ
センと呼んでいたわけである。

ウンコセンには大小の二種があつた。小形のウンコセ
ンは長さ四尋、大形は八尋もあり、蛇^{へび}崎にはそのどち
らもあつた。小形は女島、長島、久部、長瀬、川^{かわ}麻^あ、津志
河内にあつた。

このウンコセンは岸から板で作つた樋をかけて、附近
の人々の迷惑をかえり及ばず流しこんでいた。番^{ばん}五^ご川^{がわ}を以
じめ中江川にもあつた。佐吉神社の北側から太平橋へ今
は幹線道路になつてゐる一をくぐつて、内所川はウンコ
船を乗り入れて、例の樋を使って女島が長島のおいさん
が、盛んに流しこんでいた。時には潮が引いてウンコセ
ンが動けなくなり、おいさんは姿を消す。近所の人は臭
気と蠅になやまされ、警察に届ける。町役場の衛生係や
保健所に交渉したかどうかどうにもならない。と、そんなこと
もあつた。

佐伯市に尿尿処理場へ処理能力三〇バレルができたの
は昭和四十年三月、汲取料金十八バレルにつき十九円。

佐伯市と南郷八ヶ所村の共同の尿尿処理場へ処理能力
五〇バレルができたのは昭和四十四年三月、汲取料金十
八バレルにつき二十四円。以来料金は据置、業者は諸物価の
値上りを理由に、汲取料金の値上げをしきりと要求する。
此処に於いて市は、県下の汲取料金の調査し、昭和四
十六年十月一日から、汲取料金十八バレルにつき三十二円に
値上げを、市議会の承認を得て実施することになつた。

話はちよつとかあるが、私は大正十五年三月一日付で
上野村農業補習学校教諭に任命された。

醇^{じゆん}林^{りん}にして人情の厚い村である。この村にはコンクリ
張の大きな水路があり、中野村鬼が瀬の井堰から、清冽

な水が年中流れていた。村人は大根や菜葉を洗い、朝は
楊子を使い口をすすぎ顔も洗い、日中は手足を洗ひ着物
など洗濯をする。流れを汚すことのないように及々努め
ていた。ところが私は盛夏の頃、うかつにもこの水路で
肥桶を洗つて、生徒からひどく注意され、教師としてま
ことに恥ずかしい思いを深くした。以来流れを汚さぬこ
とに努めた。

私の郷里の蛇崎の慣行農法では、水田に糞尿を使用し
て効果を挙げている。粘質壤土で分^{ぶん}蘗^{ぼつ}もよく、生育旺盛
で人目を引く出来栄であつたので、学校の水田にその
法を用い、生徒の尿尿を施用したところ、出来すぎて稲^{いね}
熱^{あつ}病^{びやう}にかかり物笑となつた。先生は話ほうまいが、稲は
どうかと笑われた。反省するに、砂質壤土に速効性の窒
素肥料を多量に使用したことがその原因であつた。

南海部郡農会主催の、学校園蔬菜品評会が開催された。
夏の失敗をくりかえしてはならぬと、全知全能を傾注し
て大根白菜を蒔いた。播種期、施肥量を入念に計画し、
管理にも充分努めた。

肥料は得やすい生徒便所の尿尿を使った。その後の登
育も寸寸ぶる順調。そして秋の品評会には見事優勝旗を
獲得した。生徒も喜んだ。下野田に転任してからの事で
ある。

「今茂米先生は女の子に下肥をかつがせる。」
と、学校近くの豆腐屋の婆さんと、近頃の婆さんの立話
である。

「ちよつと待ちなさい。もう一回言いなさい。二人の話
ではちよいと声が大きすぎますよ。よく聞いて貰いま
す。絹の着物も縫えど大島の羽織も縫えて、そして肥
まかつが。何でもできる嫁さんを育てるのか私の仕事
であります。」

と言へば、二人の婆さん共、

「そうだ、」

と簡單に笑つて賛成してくれた。
私が最も痛快に思うのは、その当時不平不満も言わずに肥料をかついでいた生徒が、美しく眩しいような主婦となり、見事な野菜を、

「先生、これは私が肥をかけて育てあげたものです。」
と、誇らしげに言う姿に接したときです。
（住所——佐伯市城南区）

旅行記

天草、島原、そして長崎へ

—キリシタン遺跡探訪の旅にかり—

文 高 水 嘉 吉
俳句 鳥人 末 光 拳
（天分市、市町）

大分県地方史研究会と、大分探勝アルコウ会共催の標記の旅に参加した。九月二十四日から二十六日まで二泊三日の旅で、日程コースは左記の通りであった。

二十四日 大分 竹田 セツ森古墳 大津街道 宮本
武蔵塚 熊本市竜田山自然公園 細川ガラシヤ夫人墓
天草五橋 本渡市殉教公園 本渡市梅林ホテル泊

二十五日 茶臼所富岡城跡 首塚 鬼池 口ノ津 原
城跡 島原城 雲仙 本多ホテルで昼食 地獄めぐり

千々石松橋神社 少年ローマ使節千々石清左衛門 長崎
市二十六聖人記念館 平和公園 魚ノ所とらやホテル泊

二十六日 興福寺 崇福寺 異人館 グラバー邸 晝
食 国貝所（島原） 長州所（熊本） 熊本 竹田 大分

一行は貸切大型バス一台の五十余名であったが、本年の五月十八日に堅田合戦の跡を探訪した際、立川先生と共に大分から来佐参加された坂ノ市の末光拳氏夫妻が居られ、再会を喜び合つて行を共にした。末光氏は鳥人と号して俳句を作られることは、前号市野瀬会員の富士登山記にも掲載されて、皆さんに親しまれてゐるが、今回も各所の印象を十七字にまとめて送つて下さつたので、詞氏の詠承を得て適宜に掲載することにした。

セツ森古墳

竹田市郊外、旧菅尾村にある。街道からちよつと入つた所である。こじんまりした前方後円墳と円墳（前方部が重複したものかも知れない）数個がある。古墳時代には此の地方に居た豪族の墳墓であるが、誰のものか定かでない。

露草の瑠璃と袴に古墳群 鳥 人

武蔵塚

大津街道沿ひのこんもりした森の中に加藤清正を祀る小社があり、その境内に武蔵塚がある。塚前にはぬかづいて剣聖の再影と偲ぶ。

剣と画の精魂ここに竹の春 鳥 人

細川ガラシヤ夫人の墓

熊本市竜田山自然公園の中に、細川家の廟所があり、その一角にガラシヤ夫人の墓がある。細川家の他の墓と同様、五輪作りの堂々たるものである。秀林院殿華屋宗王大姉淑霊と記されている。容姿端麗、敏和聡明のほまれが高かつた夫人の、苦難の生涯を想つて感無量。